

[D年] 受難節第5主日(2024年3月17日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書 63章1～9節**

- 1 「エドムから来るのは誰か。
ボツラから赤い衣をまとって来るのは。
その装いは威光に輝き
勢い余って身を倒しているのは。」
「わたしは勝利を告げ
大いなる救いをもたらすもの。」
- 2 「なぜ、あなたの装いは赤く染まり
衣は酒ぶねを踏む者のようなのか。」
- 3 「わたしはただひとり酒ぶねを踏んだ。
諸国の民はだれひとりわたしに伴わなかった。
わたしは怒りをもって彼らを踏みつけ
憤りをもって彼らを踏み砕いた。
それゆえ、わたしの衣は血を浴び
わたしは着物を汚した。」
- 4 わたしが心に定めた報復の日
わたしの贖いの年が来たので
- 5 わたしは見回したが、助ける者はなく
驚くほど、支える者はいなかった。
わたしの救いはわたしの腕により
わたしを支えたのはわたしの憤りだ。
- 6 わたしは怒りをもって諸国の民を踏みにじり
わたしの憤りをもって彼らを酔わせ
彼らの血を大地に流れさせた。
- 7 わたしは心に留める、主の慈しみと主の栄誉を
主がわたしたちに賜ったすべてのことを
主がイスラエルの家に賜った多くの恵み
憐れみと豊かな慈しみを。
- 8 主は言われた
彼らはわたしの民、偽りのない子らである、と。
そして主は彼らの救い主となられた。
- 9 彼らの苦難を常に御自分の苦難とし
御前に仕える御使いによって彼らを救い
愛と憐れみをもって彼らを贖い
昔から常に
彼らを負い、彼らを担ってくださった。

【使徒書日課】**コロサイの信徒への手紙 2章8～15節**

- 8人間の言い伝えにすぎない哲学、つまり、むなし
いだまし事によって人のとりにされないように
気をつけなさい。それは、世を支配する霊に従っ
ており、キリストに従うものではありません。⁹キ
リストの内には、満ちあふれる神性が、余すところ
なく、見える形をとって宿っており、¹⁰あなたが
たは、キリストにおいて満たされているのです。
キリストはすべての支配や権威の頭です。¹¹あな
たがたはキリストにおいて、手によらない割礼、
つまり肉の体を脱ぎ捨てるキリストの割礼を受け、
¹²洗礼によって、キリストと共に葬られ、また、キ
リストを死者の中から復活させた神の力を信じて、

キリストと共に復活させられたのです。¹³肉に割
礼を受けず、罪の中にいて死んでいたあなたがた
を、神はキリストと共に生かしてくださったので
す。神は、わたしたちの一切の罪を赦し、¹⁴規則に
よってわたしたちを訴えて不利に陥れていた証書
を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除い
てくださいました。¹⁵そして、もろもろの支配と権
威の武装を解除し、キリストの勝利の列に従えて、
公然とさらしものになさいました。

【福音書日課】 ヨハネによる福音書 12章20～36節

²⁰さて、祭りのとき礼拝するためにエルサレム
に上って来た人々の中に、何人かのギリシア人が
いた。²¹彼らは、ガリラヤのベトサイダ出身のフィ
リポのもとへ来て、「お願いします。イエスにお目
にかかりたいのです」と頼んだ。²²フィリポは行っ
てアンデレに話し、アンデレとフィリポは行って、
イエスに話した。²³イエスはこうお答えになった。
「人の子が栄光を受ける時が来た。²⁴はつきり言
っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、
一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結
ぶ。²⁵自分の命を愛する者は、それを失うが、この
世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命
に至る。²⁶わたしに仕えようとする者は、わたしに
従え。そうすれば、わたしのいるところに、わた
しに仕える者もいることになる。わたしに仕える
者がいれば、父はその人を大切にしてください。」

²⁷「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、
わたしをこの時から救ってください』と言おうか。
しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。
²⁸父よ、御名の栄光を現してください。」すると、
天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現し
た。再び栄光を現そう。」²⁹そばにいた群衆は、こ
れを聞いて、「雷が鳴った」と言い、ほかの者た
ちは「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った。
³⁰イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたの
は、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。
³¹今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配
者が追放される。³²わたしは地上から上げられる
とき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」
³³イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを
示そうとして、こう言われたのである。³⁴すると、
群衆は言葉を返した。「わたしたちは律法によっ
て、メシアは永遠にいつもおられると聞いていま
した。それなのに、人の子は上げられなければなら
ない、とどうして言われるのですか。その『人
の子』とはだれのことですか。」³⁵イエスは言われ
た。「光は、いましばらく、あなたがたの間にあ
る。暗闇に追いつかれないように、光のあるうち
に歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこ
へ行くのか分らない。³⁶光の子となるために、光
のあるうちに、光を信じなさい。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書 63章1～9節

- 1 「エドムから来るのは誰か。
深紅の衣を着てボツラから来られる方。
装いに威光を輝かせ
大いなる力で進んでこられるこの方は。」
私だ。義によって語り
救う力の大きいなる者。
- 2 「なぜ、あなたの装いは赤く
あなたの衣は
ぶどうの搾り場を踏む人のようなのか。」
- 3 私は一人で搾り桶を踏んだ。
もろもろの民の中で
誰一人私と共にいる者はいなかった。
私は怒って彼らを踏み
憤って踏みつけた。
彼らの血が私の衣に飛び散り
私は装いをすっかり汚してしまった。
- 4 私の心にある報復の日
私の贖いの年が来た。
- 5 私は見回したが、誰も助ける者はなく
うろたえたが、支える者は誰もいなかった。
私の腕が私の救いとなり
私の憤りが私を支えた。
- 6 私は怒ってもろもろの民を踏みつけ
憤って彼らを酔わせ
彼らの血を大地に流れさせた。
- 7 私は、主の慈しみと主の誉れを語ろう。
主が私たちに報いてくださった
すべてのことのゆえに。
主がその憐れみと豊かな慈しみに従って
イスラエルの家に報いてくださった
多くの恵みを告げよう。
- 8 主は言われた
彼らは確かに私の民、偽りのない子らであると。
そして主は彼らの救い主となられた。
- 9 彼らが苦しむときはいつでも、主も苦しみました。
御前に仕える御使いによって彼らを救い
その愛と憐れみによって彼らを贖い
昔からずっと彼らを負い、担ってくださった。

コロサイの信徒への手紙 2章8～15節

8 空しいだまし事の哲学によって、人のとりこに
されないように気をつけなさい。それは、人間の
言い伝えに基づくもの、この世のもろもろの靈力
に基づくものであり、キリストに基づくものではありません。⁹キリストの内には、満ち溢れる神性
がことごとく、見える形をとって宿っており、¹⁰あなた
がたは、キリストにあって満たされているの
です。キリストはすべての支配と権威の頭です。
¹¹あなたがたはキリストにあって、手によらない
割礼を受けました。それは肉の体を脱ぎ捨てること、
すなわち、キリストの割礼です。¹²あなたがた
は、洗礼によってキリストと共に葬られ、キリス

トを死者の中から復活させた神の力を信じて、キ
リストと共に復活させられたのです。¹³あなたが
たは過ちによって、また肉に割礼を受けずに死ん
でいた者でした。神は、そのようなあなたがたを
キリストと共に生かし、私たちのすべての過ちを
赦してくださいました。¹⁴数々の規則によって私
たちを訴えて不利に陥れていた借用書を破棄し、
これを十字架に釘付けにして取り除いてくださ
ったのです。¹⁵こうして、神はもろもろの支配と権威
の武装を解除し、キリストにあって彼らを勝利の
行進に従えて、公然とさらしものになさいました。

ヨハネによる福音書 12章20～36節

²⁰さて、祭りのとき礼拝するためにエルサレム
に上って来た人々の中に、何人かのギリシア人が
いた。²¹この人たちが、ガリラヤのベトサイダ出身
のフィリポのもとに来て、「お願いします。イエス
にお目にかかりたいのです」と頼んだ。²²フィリポ
は行ってアンデレに話し、アンデレとフィリポは
行って、イエスに話した。²³イエスはお答えになっ
た。「人の子が栄光を受ける時が来た。²⁴よくよく
言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななけれ
ば、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実
を結ぶ。²⁵自分の命を愛する者は、それを失うが、
この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠
の命に至る。²⁶私に仕えようとする者は、私に従っ
て来なさい。そうすれば、私のいる所に、私に仕
える者もいることになる。私に仕える者がいれば、
父はその人を大切にしてくださる。」

²⁷「今、私は心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、私
をこの時から救ってください』と言おうか。しか
し、私はまさにこの時のために来たのだ。²⁸父よ、
御名の栄光を現してください。」すると、天から
声が聞こえた。「私はすでに栄光を現した。再び
栄光を現そう。」²⁹そばにいた群衆は、これを聞いて、
「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは「天
使がこの人に話しかけたのだ」と言った。³⁰イエス
は答えて言われた。「この声が聞こえたのは、私
のためではなく、あなたがたのためだ。³¹今こそ、
この世が裁かれる時。今こそ、この世の支配者が
追放される。³²私は地から上げられるとき、すべて
の人を自分のもとに引き寄せよう。」³³イエスは、
ご自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、
こう言われたのである。³⁴すると、群衆は言葉を返
した。「私たちは律法によって、メシアはいつま
でもおられると聞いていました。それなのにあなた
は、人の子は上げられなければならない、とど
うして言われるのですか。その『人の子』とは誰
のことですか。」³⁵イエスは言われた。「光は、今
しばらく、あなたがたの間にある。闇に捕らえら
れることがないように、光のあるうちに歩きな
さい。闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分
からない。³⁶光の子となるために、光のあるうちに、
光を信じなさい。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

- ・3月17日「受難節第5主日」の日課主題は「十字架の勝利」。
- ・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、終末預言的な言説で「主の報復の日」が告げられる預言箇所。使徒書日課は、「コロサイの信徒への手紙」から、世の諸霊に警戒してキリストの支配に拠って立つべきことを教える箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、受難物語中のギリシア人の訪問を受けて応答された主イエスの教えと宣言が伝えられる箇所。

旧約日課(イザヤ 63章より)

- ・「イザヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一に置かれた預言書。正典「律法と預言者」の編纂において中核を占める文書として扱われたと推察され、意図的な編集編纂が施されていると考えられる。すなわち、36～39章には「列王記下」18～20章の「預言者イザヤとヒゼキヤ王の物語」がそのまま掲載されていること、39章までと40章以下では明らかに異なる時代を背景にしていることを隠さずにいることなどには、編集者の意図をくみ取ることが期待されていると考えられる。39章までは、前8世紀末頃に南王国ユダの宮廷預言者として活動した歴史的預言者イザヤの預言集と預言活動の記録であり、おそらく宮廷で書記官によって作成された宮廷預言者の記録としての「預言者イザヤの預言の書」のような文書が下敷きになっていると考えられる。他方、40章以下は、前6世紀中葉以降、バビロン捕囚から解放されてエルサレムにおいて神殿再建事業およびユダヤ共同体再興事業が進められて行こうとする時代に、その一翼を担いながら、歴史的預言者であるイザヤの預言者としての伝統を理想とし継承してきた祭司・預言者集団が語った、あるいは記した預言の集成となっており、通例「第二イザヤ」と呼ばれている。「第二イザヤ」については、40～55章と56章以下を区別し、後者を「第三イザヤ」と分けて解釈する聖書学者もあるが、39章までと40章以下を区別するほどの重要な意義は十分に認められていない。日課箇所は、「第二イザヤ」の中、場合によっては「第三イザヤ」の中に位置づけられる。
- ・「第二イザヤ」は、確かに56章以下で終末預言的な傾向を強めている。つまり、将来のある日、主が到来して最終的な救済を実現されるときがある、という観念に基づいていると思われる言説が多く見受けられる。ただし、元来正典に含まれる預言書の多くでは、預言者自身あるいは告知を聞いた者が自ら確かめうる程度の将来までしか視野に含んでいないと考えられ、後世の黙示思想を伴うような終末観を明確に有しているとは必ずしも言えない。日課箇所も、歴史的出来事を援用しながら、将来に対する見通しを預言として告げようとしている、と考えることができるだろう。

使徒書日課(コロサイ2章)

- ・「コロサイの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の7番目に置かれた書簡文書。アジア州コロサイの教会共同体に宛てて、近隣ラオディキアの教会との間で書簡の回覧をすることを前提に記されている。両都市は、アジア州の環状街道沿いに位置し、エフェソなど街道沿い諸都市との交流も盛んであったと考えられている。同じ「パウロ書簡集」に含まれる「エフェソの信徒への手紙」と内容や表現において共通点が多く、諸都市の教会共同体も同じような教会文化を共有していたと考えられる。パウロは、シリア州アンティオキアの教会共同体から派遣されていたバルナバ宣教団から離脱してから、アジア州での活動を禁じられてマケドニア伝道に赴き、続いてコリント伝道に携わるが、その後、いったんエフェソを経由してエルサレムおよびアンティオキアに報告に行き、それから二年ほどはエフェソを拠点として活動していたとされる(使徒16～19章)。以前に活動を禁じられたアジア州のエフェソを拠点として二年間も活動できたのは、パウロがバルナバら主要な使徒らと和解し、伝道方針について合意が形成されたためだろう。パウロはそれによって、「ガラテヤの信徒への手紙」に見られるような自分の福音理解を徹底して純化させた主張を緩め、より調停的な立場で福音理解を組み立て直したのであろう。アジア州エフェソを拠点とした時期は、そのような立場での主張が深められたときであったとも考えられる。そのような時期に、コロサイやラオディキアの教会共同体も関わっていたのである。その後、何らかのトラブルに巻き込まれてパウロはエフェソを離れることになるが、その後記されたであろう本書や「エフェソの信徒への手紙」は、より調停的で、和解と一致を促す福音を強調する内容となっている。
- ・パウロは、本書簡や「エフェソの信徒への手紙」では、他の書簡ではあまり問題にしない「世を支配する霊」であるとか「天使礼拝」などの用語を用いて論を進めている。アジア州は古典古代以来のギリシア文化を継承する地であると同時に、アケメネス朝ペルシアの時代以降、ペルシア、マケドニア、ローマといった大国の支配に服してきた地域でもあり、さまざまな思想文化が混雑した文化社会を形成していたとされる。「世を支配する霊」や「天使礼拝」なども、ペルシア系宗教(ゾロアスター教?)の世界観の影響を受けた発想による表現と見られ、パウロは、エフェソに滞在して得た経験を踏まえて、宛先地の思想文化に馴染んだ信者に即した表現を選んでいるものと考えられる。
- ・宛先の人々が異邦人であることが、「肉に割礼を受けず、罪の中に死んでいた」という叙述から分かる。パウロは、異邦人にとって「キリストと共に」される「洗礼」が「割礼」によらず罪を赦される方途だとしている。ここでの洗礼論は、「ローマの信徒への手紙」6章で展開している論と一致している。他方、「ガラテヤ書」の論は、「割礼」と「洗礼」の関連性が明らかではない。

福音書日課(ヨハネ 12 章より)

・日課箇所は、主イエスがエルサレムで過ごされた最後の週、神殿参拝に訪れていたギリシア人が主イエスが訪ねて来た折にお語りになられたことを伝えている。「ヨハネ福音書」は、「受難物語」を、他の福音書とは異なる仕方で伝えているが、日課箇所も他の福音書にはない「ヨハネ」独自の伝承に基づく逸話。前段の「エルサレム入城の逸話」を踏まえて、日課箇所の場面は、「受難の出来事」の意味を明らかにする意図で置かれていると考えられる。その第一の鍵は、23節「人の子が栄光を受ける時が来た」とあると言える。

・「栄光を受ける(<ドクサゾ>)」は、ヨハネ福音書に特徴的(新約 61 用例中 23 例)。7:39、8:54、11:4 を除くと 12 章以下に集中(12:16,23,28、13:31,32、14:13、15:8、16:14、17:1,4,5,10、21:19)。

・この場面を、「ヨハネ福音書」は、「何人かのギリシア人」が登場させることから始めている。「ギリシア人(ヘッレーン)」については、7:35 でユダヤ人たちの会話の中で触れられているが、具体的に登場するのは、日課箇所が最初で最後である。「ギリシア人」は、他の福音書では「マルコ福音書」が女性形(ヘッレーニス)で「シリア・フェニキア」の女性について説明している例があるのみである(マルコ 7:26)。「使徒言行録」および「パウロ書簡集」では、「ギリシア人」の用例は少ない。ただし、「マルコ福音書」の例が示すように、新約聖書における「ギリシア人」の用法では、厳密に「ギリシア系」の人を指しているわけではなく、「ユダヤ人」以外のギリシア語を話す異邦人を総称している場合がほとんどである。

・「ヨハネ福音書」は、主イエスの宣教が「ギリシア人≒異邦人」にも及ぶことをもって、受難の出来事が完成するという考えのもとに、ここで主イエスの「栄光を受ける時が来た」と語らせているのであろう。

・ここに登場する弟子、「フィリポ」と「アンデレ」は、二人とも、1 章で最初の弟子として従うようになった者たち。「アンデレ」は、元来は「洗礼者ヨハネ」の弟子であったが、ヨハネの示唆によってもう一人の弟子と共に主イエスに従うようになったとされ、他の福音書とは異なり兄の「シモン＝ペトロ」に先んじている。「フィリポ」は、アンデレおよびシモン＝ペトロと同じベトサイダ出身者であることが、1 章でも説明されていた。この二人と、名を明かされない弟子(ヨハネ?)、また「トマス」が、本福音書では重要な場面で描かれる。

・27 節「わたしは心騒ぐ」の直訳は、「わたしの魂(プシュケ)は揺り動かされた」。この後、同様の表現が、13:21「イエスは…心を騒がせ」=「霊(プネウマ)を揺り動かされ」、14:1/14:27「心を騒がせるな」=「あなたがたの心(カルディア)を揺り動かされるな」、と重ねて用いられていくが、「心」と訳されている原語はそれぞれ異なる。敢えて訳し分ければ、順に、「わたしは武者震いしている」、「イエスは霊に突き動かされた」、「あなたがたはビクビクする」とでもなるかもしれない。

来週の誕生日 (3月17日～23日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-303 番「丘の上の主の十字架」(= II 182 番)は、米国メソジスト派の伝道者 J.ベナードの作詞作曲、初演は 1913 年で、以降、ラジオ放送や大規模な伝道集会で歌われて大衆的讃美歌として普及。原題は「古い荒削りの十字架」。

・21-57 番「ガリラヤの風かおる丘で」(= III 5)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともにおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・藤田尚晃が曲を付した。

・21-502 番「光のある間に」(= I 326「ひかりにあゆめよ」)は、19 世紀英国の「クエーカー詩人」として知られるバーナード・バートンの詩集(1836 年発行)所収の歌詞。I ヨハ 1:7 の聖句に基づく詩だが、日本語版ではヨハネ 12:36 に基づいて改変されている。曲は 18~19 世紀英国のチェロ奏者サミュエル・スタンレーが詩編 23 編の詩編歌のために作曲。この讃美歌は歌詞も曲も、英語圏の教派讃美歌集では 20 世紀中葉以降、採用されていない。

21-303「丘の上の主の十字架」

On a Hill far away

1. On a hill far away stood an old rugged cross, / the emblem of suffering and shame; / and I love that old cross where the dearest and best / for a world of lost sinners was slain.

Refrain:

So I'll cherish the old rugged cross, / till my trophies at last I lay down; / I will cling to the old rugged cross, / and exchange it some day for a crown.

2. O that old rugged cross, so despised by the world, / has a wondrous attraction for me; / for the dear Lamb of God left his glory above / to bear it to dark Calvary.

3. In that old rugged cross, stained with blood so divine, / a wondrous beauty I see, / for 'twas on that old cross Jesus suffered and died, / to pardon and sanctify me.

4. To the old rugged cross I will ever be true; / its shame and reproach gladly bear; / then he'll call me some day to my home far away, / where his glory forever I'll share.

21-502「光のある間に」

Walk in the light: so shalt thou know

1. Walk in the light: so shalt thou know / That fellowship of love / His Spirit only can bestow / Who reigns in light above.

2. Walk in the light: and thou shalt find / Thy heart made truly his / Who dwells in cloudless light enshrined, / In whom no darkness is.

3. Walk in the light: and thou shalt own / Thy darkness passed away, / Because that light hath on thee shone / In which is perfect day.

4. Walk in the light: and thine shall be / A path, though thorny, bright; / For God, by grace, shall dwell in thee, / And God himself is light.